

正倉院展

副校長 細井 宏一

先日、全国附属学校の副校長が集まる研修会が奈良で行われ、出張させていただいた。その会の中で、奈良国立博物館の館長をされていた方のご講演を聴く機会があった。テーマは「文化の力、歴史の力」で、正倉院展についてのお話であった。豊富な見識とわかりやすい説明で、たいへん興味深かった。



正倉院展は1年に1回だけ短期間公開される特別展である。日本だけでなく世界中から多くの観光客が訪れる。私が奈良に出張したときは丁度その真っ最中で、多くの人々で奈良の町は賑わっていた。正倉院展は世界中のあまたある特別展覧会の中でも、集客数が世界ナンバー1なのだそうだ。しかも、毎年毎年。

「なぜ、この正倉院展は展覧会ナンバー1に、毎年なっているのでしょうか。」
そうお話しされて、講演はスタートした。

正倉院が作られたのは西暦756年、今から1200年以上昔のこと。その時代の日本の生活様子がわかるものがきれいに残っている。それを展示しているのが正倉院展。講師の先生によると「1200年以上も昔のものがきれいに残っているのは日本だけです。このようにものを大切にすることも日本人の心、日本人のすばらしさといえるでしょう」とおっしゃっていた。宝物は痛み易いので、毎年出品することはできず、10年に1度しか出品しないようになっているのだそうで、これもナンバー1になる理由の1つと思えた。

正倉院は「誰が何のために」作ったのか。作ったのは聖武天皇のお后、光明皇太后である。講師の先生は「聖武天皇と光明皇太后はたいへん仲がよかったといわれています。」とお話される。イメージが沸くようにお話されるので、ぐいぐい引き寄せられた。聖武天皇は念願の東大寺の大仏を752年に建立し、開眼供養を行った。ところがそのわずか4年後に亡くなってしまふ。光明皇太后はとても悲しんだ。身の回りにある聖武天皇の品々を見ると悲しくていたたまれなくなる。そこで光明皇太后は七七忌に際して、聖武天皇遺愛の品を大仏様に奉獻することに決め、正倉院をつくって、そこに宝物を丁寧に納めたのだそうだ。「だからとてもきれいに残っている」ということらしい。そして講師の先生は続けてこうお話された。

「であるから、正倉院というのは光明皇太后の悲しみの上になりたっているものなのです。」
そう考えると正倉院の宝物の見方が変わってくる。

研究会終了後、帰りの交通機関に乗るまでに少々時間があつたので、正倉院展に実際に行ってみることができた。今、目の前にあるものが、江戸時代よりもずっと昔の方が使っていたものだと考えると、タイムスリップしたような感覚を覚える。



今年は、朱色のきれいな靴が出品されている。この靴は聖武天皇が大仏建立開眼式のときに履いていた靴とされている。そこには光明皇太后と聖武天皇との思い出があり、亡くなった悲しみがあり、それらとともに正倉院に納められたのだ。そう考えると「1200年前の靴なのに、きれいに残っていてすごい。」といったことだけでなく「光明皇后はどのような気持ちでこの靴を正倉院に納めたのだろうか？」と想像して、その靴の見え方がなんとも味わい深くなってきた。そして、気の遠くなるような昔の人のことなのに、人間として同じであり、とても身近なことのようにも感じられた。「歴史を学ぶとはこういうことなのです。それが歴史の力なのです。」という講師の先生の言葉が、とても強く心に響いてきた。歴史を学ぶことの素晴らしさを感じた。そして不思議だが「明日から頑張ろう」という力が沸いてきた。知識の詰め込みではない。「学ぶ」とはこういうことなのかと感じ、子どもたちにも「学ぶことの素晴らしさ」を伝えていきたいと改めて思い直した正倉院展であった。